

学生による実践的学びの実現を目指した 教員養成の方法に関する研究

A Method of Teacher Education Aiming at Practical Learning by Students

荒井 真一

ARAI Shini-ichi

Once a year, teachers and education researchers from all over Hokkaido gather in Sapporo, and hold a meeting for practical education research. In 2009 I made students in college of teacher education take part in this meeting, and give presentations about an educational practice they watched. We argued about contents of the practice each other. I examined papers they wrote, and found the three points of understanding by students .

1. Understanding of the present conditions about school education
2. Understanding of students' present circumstances
3. Understanding by arguments after the meeting

In 2010 I made students in several colleges take part in this meeting. Students wrote papers about significance of the meeting. According to the three points of understanding, I examined the contents of these papers. As a result of the examination, I found three points of understanding were more applicable to the papers in 2010 than in 2009. But a few papers were not very applicable because papers in 2010 were twice as many as papers in 2009. Three points of understanding are effective, but I need a little more examination.

1. 学生による認識形成をとらえるための課題と方法

本稿の目的は、実践的な学びを経た学生の認識形成のありようについて、一般性を導き出すことにある。この目的を達成するため、本稿では教育研究集会への学生の参加報告資料を主たる検討材料とする。

2006(平成18)年7月の中央教育審議会答申で「実務実習や事例研究、現地調査(フィールドワーク)、模擬授業等を取り入れる」ことがとりあ

げられたように、教員養成課程において実践的な学びの実現は不可欠の要件となっている。しかし一方で、木塚雅貴が指摘するように「教員養成段階の学生が授業実践を行う場合は教育実習に限定される傾向」にある⁽¹⁾。このような状況の下で筆者は、北海道全域の教員たちが集まる教育研究集会へ学生を参加させ実践的な学びの実現を目指した。

北海道では、年に一度全道各地の教員が札幌に集まり、合同教育研究集会（以下合同教研と略す）が開催される。この集会において共同研究者を務める筆者は、2009年に教員養成大学で自身の担当する教職科目受講者58名をこの集会に参加させた後、講義内において学生各々の目にした実践について報告させ受講学生全員とそれら実践の内容について議論した。

2009年実践における学生の参加報告や期末レポートから、学生の認識形成に対する成果が確認された。それゆえ2010年においても、合同教研への参加と実践報告を学生に対して行わせた。ただし2010年には、2009年の2倍となる複数の大学・学科の教職課程履修学生・計121名が参加することとなった。

2年間にわたる実践の成果を整理し本稿の目的とする認識形成における一般性を導き出すため、以下本稿第2章では合同教研への参加概要について述べる。この記述の後、続く第3章では2009年実践時に学生により提出されたレポート記述を検討材料として、教育研究集会への学生参加により達成される認識形成の枠組みを導き出す。これら枠組みを踏まえて第4章では2010年実践時に学生により提出されたレポート記述を検討し、複数の大学・学科の教職課程履修学生121名による認識形成のありようについての一般性を導き出す。

2. 教職課程講義における合同教研への参加と概要

2.1. 合同教研の概要

2010 年における合同教研の正式名称は「2010 合同教育研究全道集会」であり、実行委員会を構成する加盟団体は下図 1 に示す 42 団体である。上記集会は、2010 年 11 月 13 日（土）、14 日（日）、2 日間にわたり、札幌市内で開催され、延べ 1324 名が参加した。集会は、教育のタベ、テーマ討論、特別講演、および分科会の 3 部により構成されている（図 2 参照）。

全大教北海道 道私教組 道教組 道高教組 札幌保育労働組合 福祉保育労働北海道本部 建交労北海道本部 建交労札幌学童保育支部 勤医労道本部 札幌市学童保育連絡協議会 新成人北海道本部 共同映画社 道労働者学習協議会 自由法曹団 憲法会議 道平和委員会 キリスト者平和の会 子どもと教育・文化道民の会 北海道子どもセンター 道民団教育団体連絡協議会 日本国民救援会北海道本部 北海道高等学校退職教職員の会 北海道新英語教育研究会 高校国語サークル AALA 連帯委員会 日中友好協会 障道協 札幌郷土を掘る会 北海道合唱団 出版労連札幌地協 劇団さっぽろ 道労連 札幌地区労連 道医労連 高校センター教育研究所 全障研北海道 ウィルタ協会 札幌保育連絡会 トボス 全北海道退職教職員の会 少数民族懇談会 北海道フリースクール等ネットワーク

図 1 2010 合同教育研究全道集会加盟団体実行委員会（2010 合同教育研究全道集会実行委員会編『北海道の教育』363 ページ）

分科会は主たる交流の場となっている。分科会は教科の区分や教育問題に対応し 24 に分けられており、下表 1 は 2010 年集会における分科会毎のレポート数を示している。研究集会の概要は、『北海道の教育』という書籍として年度毎にまとめられ、出版されている。

1 日目・テーマ討論

1. 「子どもの実態から出発する授業・教育課程・学校づくり」
2. 『生きづらさ』に寄り添う 子ども・若者・大人がつながりあえる地域と社会を
3. 「他者からの“まなざし”をうけとめて・アイヌ民族・在日コリアンそして戦争」

・分科会

・教育のタベ

1. 高校生の演劇
2. 開会集会：代表委員挨拶・基調提案
3. 記念講演：「地域から、子ども理解と学習観を深めあうおとなの新しい共同を」 田中 孝彦（武庫川女子大学）

2 日目・分科会

図 2 2010 合同教育研究全道集会における開催内容（『北海道の教育』364 ページ）

表1 2010 合同教育研究全道集会の分科会構成と参加者・レポート数
(『北海道の教育』365 ページ)

分科会	レポート数	分科会	レポート数
第一 国語教育	9	第十三 教育課程と子どもの学力・評価	9
第二 外国語教育	4	第十四 学校と家庭の生活指導	11
第三 社会科教育	14	第十五 教育条件確立の運動	8
第四 数学教育	9	第十六 子ども、父母参加の学校づくり	7
第五 理科教育	9	第十七 地域における子育て・学習運動	7
第六 美術教育	9	第十八 地域と学校の文化・スポーツ活動	3
第七 書教育	6	第十九 国民のための大学づくり	6
第八 音楽教育	6	第二十 障害児・障害者の教育と福祉	20
第九 技術・職業教育	6	第二十一 環境・公害と教育	8
第十 家庭科教育	6	第二十二 平和・憲法、人権・民族と教育	9
第十一 保健・体育教育	10	第二十三 子ども・青年の発達と教育	9
第十二分科会 総合学習・生活科	7	第二十四 不登校・登校拒否・高校中退	6

2.2. 講義における集会参加の位置づけ

2009-10 年に担当した教員養成大学における教職科目「教育課程と教育方法」、および2010 年度に担当した私立大学における教職講義「教育課程概論」に合同教研への参加を位置づけるため、合同教研参加前の講義前半部では理論的な考察が可能な実践を学生に提示・解説した。取り上げた実践は、鹿児島県伊佐郡菱刈町立湯之尾小学校教諭白尾裕志による「伊佐の稲作」である。

2008 年に白尾は、日本社会科教育学会（滋賀大学）のシンポジウムで自身のこれまでの実践を具体的に取り上げつつ、自身の問題意識と実践との関わりについて総括した⁽²⁾。オリエンテーションに続く第2 回講義では、シンポジウムでの白尾報告を足場として、授業づくりと問題意識との関わりについて述べた。続く第3 から7 回講義では、民間教育団体を基盤とした実践の歩みについて述べつつ、白尾より提供された資料を用い実践を様々な角度から分析・考察した。白尾実践を、“先行研究・実践”として位置づけた分析・考察によって得た知見を、合同教研において学生各自による分析・考察のための枠組みとしてもらうことを講義前

半部の狙いとした。

講義後半部 7 回では、学生 2 人を 1 組（原則）として合同教研の場でみた実践 1 つに着目させ、1 組 15 分の報告（発表 10 分、質疑 5 分）を受講学生全員に行わせた⁽³⁾。学生には、合同教研参加前に分科会での質問を義務づけていた。それゆえ、報告においても分科会報告者との質疑の内容を織り込むことを義務づけた。また、報告の聴衆となる学生に対しても報告に対する質問を行うことを義務づけ、活発な質疑応答の達成を図った。学生には、参加する分科会について一切条件は付けず、各学生の望む分科会に参加させた。

2.3. 2009 年講義における集会参加報告の概要

前節で述べたように、講義後半部第 9 回から 15 回までの 7 回分を学生による合同教研報告に充てた。学生には、参加する分科会について一切条件は付けず各学生の望む分科会に参加させた。2009 年度講義時における学生による報告を分科会ごとにまとめたところ、以下のものとなった。

- ・国語教育

「ふたつの教材で中学生体験入学授業」余市高校 齊藤 圭二

『羅生門』を反戦教材として扱う」小樽商業高校(定時制) 加藤 修
(2 チーム報告)

「詩の授業と通して『こころ』を考える」森高校 館 陽一郎

- ・外国語教育

「教育運動として自分の授業を振り返る。」北海道高等学校教職員
組合 野村 健治

「小学校における外国語活動」檜山郡乙部町立栄浜小学校 大滝 英
樹

「地域キャンパス校 授業の実際」稚内高校 徳長 誠一

合同教研報告資料	
基礎学習開発専攻英語グループ	
<p>今回、合同教研に参加して一層印象的だったのは梅山郡乙訓町立栄浜小学校の大滝英樹先生の発表だった。大滝先生は平成 21 年度からの新学習指導要領の内容に伴い、今まで ALT に全てまかせていた英語学習の形から自分主導で行う授業になり、大変苦労された先生の一人である。</p> <p>大滝先生は、特に英語が得意なわけではなくむしろ苦手だったそうだが、学校の代表となつてしまい『小学校における外国語活動教員研究』にも参加したそうだ。その中で“残音練習”“クラスルームイングリッシュ”“歌・チャンツ”などをやったそうだが、これまで ALT にすべてまかせていた先生にとってはとても苦痛の時間になったそうだ。</p>	
授業の準備で苦労した点	<ul style="list-style-type: none"> フラッシュカードなどの教材作り 一思うように進まず意外と時間がかかってしまうため、一人で作るのは困難。 他の先生方にもお願いしながら少しずつストックしていく。 ALT との打ち合わせ →英語での会話は難しかったため、校長先生に同席してもらって打ち合わせを行う。 →英語で書かれた“Teaching plan”作成をほめかれ、課題となる。
いよいよ授業	<ul style="list-style-type: none"> 初回の授業では担任の隠しきれない動揺を生徒も察知し、冷笑。 ALT にも「Big voice」と言われる。 しかし activity では盛り上がり“Classroom English”はあまり活用できなかったが無事終了。 “生きた学習”を行うため、複式三校の合同修学旅行の際に英語で自己紹介。 →子どもたちは相手に英語で“伝える喜び”を感じたのでは？ →だんだん授業を組み立てるのが楽しくなる。 →画一的な授業は確かに楽だが ALT との打ち合わせで作った授業の方がやりがいを感じる。
学習のプラス面・マイナス面	<p>プラス面</p> <ul style="list-style-type: none"> ゲーム、チャンツを用いるので楽しく学習することができ、音声言語を →中心としているのでヒアリング能力も高められる。 →文法までは要求されないのでは他の授業と比べて感覚的に授業が受けられる。 →間違いを受容でき、生徒の習熟度をあまり求めない。 <p>マイナス面</p> <ul style="list-style-type: none"> Classroom English を多用した授業が望ましいが、教材研究に時間がかかる。 生かせる場を提供しなければ興味、関心で終わってしまう。 授業の準備に時間がかかり、他の授業への影響も出てくる。 <p>最後に、大滝先生はこの半年間外国語活動に振り回された感はあるが、生徒たちの興味・関心、知的な要求も高く、生徒たちの意欲的な学習態度に助けられている。また、いつもは発言の少ない生徒もこの時間だけは積極的に発言しているとおっしゃっていた。また、正直言ってしんどい……という場面も多々あるが、小中の系統性も考慮しながら指導を進めていきたいと意気込んでいた。</p>
質問・回答	<p>質問 1] 5、6 年生では外国語活動が必修化されましたが、他の学年では</p> <p>→何か活動を行っているのですか。</p> <p>回答 1] 1～4 年生では、担任主体ではなく ALT を主体とした活動を</p> <p>→行っている。また、栄浜小学校では 5、6 年生でも英語ノートを使わず、ALT との打ち合わせの中から教材を考え、実践している。</p> <p>質問 2] 小中の系統性については具体的にどのようなことを考えていますか。</p> <p>回答 2] 現在の状況としては、小学校の外国語活動には評価もないため、中学校に入るといきなり勉強！という形になってしまい、小学校の外国語学習との間にギャップがうまれてしまう。そこで、小学校からのスムーズな移行のために小中で情報交換をし、小学校では最後の方に中学校のためのつなぎを行ったり、中学校では小学校でやってきたことを使いながら授業を進めていくといったことが必要である。</p> <p>◇感想◇</p> <p>この発表を聞き、現場の先生の外国語活動に対する苦労を実感することができた。現場の先生にしてみれば突然今年から英語をやりたい、チャンツや歌も取り入れなさい、と言われてもやはりそう簡単にはいかず、とまどうことも多いだろう。しかし、授業を重ねていくごとに教師も生徒も一緒に成長していくことができる。その中でいろいろと発見もあり、新鮮な授業にもなると思う。</p> <p>そもそも英語を学習する必要があるのか、というような課題を提案された方もいたが、今回は時間がなく話し合うことはできなかった。しかし、色々な方が集まっている中でそのような話し合いをするのもおもしろそうだった。</p> <p>小学校の外国語活動には、個々の先生の能力による学習効率の差や英語ノート活用方法など色々な問題があるが、今回様々な意見が聞け、いい経験になった。</p>

図 3 「小学校における外国語活動」実践の報告

・社会科教育

「戦争の歴史を学び、未来を拓く歴史教育」日高胆振高校退職教職員会の会 高橋 守

「教育基本法にもとづく政治教育の実践」江別高校 池田 孝司（2 チーム報告）

「教育の自由を奪う道教委 一断定された『不適切な』問題と『指導内容』」音更高校 山本 政俊

「『離職の時』を教材として、使える社会保障制度を伝えたい」浦幌高校 米屋 直子

<p>教育課程と教育方法 D 合同教研報告資料</p> <p>教育基本法にもとづく政治教育の実践</p> <p>～＜１８歳選挙権・１８歳成人＞に向けて求められる教育＞～</p> <p>１、実践の背景</p> <p>国民投票法が成立したことによって、１８歳に投票権が与えられることや成人の年齢を１８歳に引き下げるなどの措置を講ずることが決まった。若者が社会参加することは非常に重要なのだが、そのためには自立をしなければならぬ。その中でも政治的自立は教育基本法による政治的中立を過剰に意識しているために、教育的富みが行われてきたとは言えない状態である。しかしながら、１８歳選挙権・１８歳成人が実現する今こそ、政治教育の重要性を認識し、教育実践を展開していく必要がある。そして、選挙権を得ることから有権者として必要な政治的教養の育成が、民主国家の維持発展のために必要不可欠なのである。</p> <p>２、実践の概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・模擬選挙、模擬国民審査 ・政治家への質問状づくり ・具体的な政治システムや重要な理念について確認していくために、政治制度について学習を行っていく。その中で代議という重要な役割を果たしている政治家に質問をした。生徒たちは自分の有権者としての重みを実感し、政治への関心を高めていった。 ・オリジナルマニフェストづくり ・「社会契約の原点」発表会 <p>まず生徒たちに「社会を構成する理由。社会をつくり、守りたい大切なもの～社会契約の原点～」である。生徒たちは「夢、信頼、個性、家族の健康、…」といったようにさまざまに書いていく。このような大切なものを守るために人々は契約をし、国家権力をつくって守っていることを確認する。そこから権力が強制にならないように民衆で統治するのか、あるいは国によってテロとかもあるもので、強い権力が必要なのかについて話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「大事な人権」発表会 <p>社会契約の原点が明確に意識されたのち、守るべきもの＝人権を考える。ここではフランス人権宣言を読んだ後、「あなた版人権宣言」を書くということで、「第１条 人は（ ）（な）ものとして出生し、かつ生存する」の（ ）にあてはまる言葉と、「第１１条 （ ）は人の最も重要な権利の一つである」の（ ）にあてはまる人権を入れてもらう。自然な日常感覚から生まれた案文がたくさん出され、こういう人権を守る国家をつくること、これに反する権力を作らないこと、これこそが民主政治なのだということを知る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ディベート「権利 VS 公共の福祉」 ・オリジナル案例案づくり <p>３、質問</p> <p>Ｑ、なぜ模擬選挙だけでなく模擬国民審査を行うのでしょうか？</p> <p>Ａ、国民審査で最高裁判官を審査するのですが、不信任率は１割前後となっています。しかも、圧倒的に選挙よりも情報量が少なく、この結果を無批判で受け止めてよいのかと考えるためです。生徒は裁判制度を学習し、最高裁判官が最終審ということも学んでおり、最高裁判官の重要性を認識しています。だからこそ、模擬国民審査を行うことでこの重要性を生徒に感じ取ってもらうことを目的としています。</p> <p>４、感想</p> <p>今回のこの実践から考えたこととして、いかにして教育の中で生徒に政治的関心を持ってもらい、そこから、１８歳になったときの有権者としての政治的意識を持ってもらえるようにすることが大事なのではないかという風に考えた。実際に若者の投票率が下がっているということが現状であり、若者が政治に興味をもてないということが実態としてある。この実践を行った先生も述べているように、若者の社会参加、政治参加は社会・家族の維持・継承においても重要なのである。そして、その意識や関心を高めていくのは政治教育で行うことが一番大事であるし、そういう部分でしかまかせないということも考えられるだろう。今回は高校生に対しての授業であったが、小学生・中学生に対してもすることによって、長期的に関心や社会に対しての意識を持たせていくようにするという方法も考えられるだろう。さまざまな実践を通していかにして生徒が政治的・社会的関心・意識を持ってもらえるかが、この実践を通してわかり、これから教師を担う私たちも社会的関心や政治的意識を持ち、生徒たちに伝えていけるかが必要になってくるのではないかと思う。</p>
---	---

図４ 「教育基本法にもとづく政治教育の実践」実践の報告

・理科教育

「実験・観察をすすめるやすくするために」砂川北高校 高橋 理恵

「北海道の子どもの理科に関する実態と科学的リテラシーについて」北海道教育大学札幌校 田中 実

「海岸の露頭の観察」「たたら製鉄」北海道教育大学釧路校 境 智洋

「フックの実験による結晶と結晶構造の理解」古平高校 道端 剛樹



図 5 「フックの実験による結晶と結晶構造の理解」実践の報告

・数学教育

「分数を考える」芦別市立啓成中学校 大竹 宏周 (2 チームによる報告)

「くり下がりの指導法の研究 ―くり下がりの数を使って―」札幌市立大谷地中学校 玉谷 光代

・家庭科教育

「生産者との調理実習」せたな町立瀬棚中学校 才門 砂江子

・教科外

「重複障害児の Y 君に教えられたこと」余市養護学校 佐藤 満

「不登校・登校拒否・高校中退」の討論について

障害児・障害者の教育と福祉分科会 報告資料	
「重複障害児のY君に教えられたこと」	
	特別支援教育専攻
<p>1. 実践の概要</p> <p>この報告は実践者の佐藤満先生が、2005年4月から2008年3月まで北海道八雲町にある病弱教育Y養護学校に勤めていた時の実践です。2005年4月Y養護学校の訪問教育を担当し、当時病棟での学習と登校が許可された一部児童・生徒に短時間の登校学習が組まれていました。2004年からこの訪問教育を担当していた先生は1名で、佐藤先生を含む他3名は2005年からの担当でした。4人のチームワークは最初から何でも話し合える雰囲気でした。児童・生徒の授業時間を増やしてあげたいとか児童・生徒一人一人が学校の先生方に認めてもらえるようにしたいとか学習内容はどのような何でも話し合えることができたそうです。</p>	
<p>2. 実践の特徴</p> <p>今回の報告で取り上げられたY君は小さな時に事故にあり、重い障害を負いました。体を意図的に動かすことが難しくなっていて骨折の危険が大きく、私たちが腕と首を少し動かすことの他、体を動かすのは許可されていませんでした。瞬きはありますが、眼珠の動きはあまり大きくなく、頭が反るような状態で眼球も上を向くようなことが多く見受けられました。どの程度見えているのかは視覚認知がどの程度なのかなどははっきりしませんが、見えているかいないかわからないけど、何か雰囲気を感じているみたいとの話から学習の教材提示を視線によって顔の上で提示するだけではなく、胸の上で提示するなどして目の動きを引き出そうとしました。以上の点を踏まえて、Y君の学習に胸郭の動きをモデルで伝えて音を出す学習を始めました。呼吸に合わせた胸郭の動きはY君の貴重な体の動きでした。モデルは重さをそれほど感じさせずに音を出して遊ぶには良い教材でした。そして、音楽発表の登校学習の日、モデルに倣う動きでフリーチャイムを動かし、その音をマイクで拾っている時のことです。佐藤先生が壁かに見られていると思い、Y君に目をやると、視線は音の出る方向に向いていました。驚くと同時に感動したそうです。その後、音楽発表のビデオを見ると、たくさん瞬きをしていることも確認できたそうです。Y君のうちに秘めた力、生きる力を見る思いがしました。訪問教育という限られた学習環境でも工夫するということが大事なのだと思います。</p>	
<p>3. 報告者の質問と実践者の解答</p> <p>・質問</p> <p>Y君のように、骨折の危険性があり、あまり動かすことができないという状態で、ビデオの撮影や、フリーチャイムを鳴らすなどの実践的な学習を行っていましたが、このようなことをするには保護者の理解がとても必要だと思います。Y君の保護者との関わり合いというものはどういったものだったのですか？</p> <p>・実践者の解答</p> <p>実はこの実践の2カ月後にY君は亡くなってしまったのですが、Y君が亡くなった後もY君の保護者は養護学校のレクレーションや色々な催しに参加して、お手伝いをしてくれるくらい理解がありました。その理解というものは、Y君の保護者はY君と一緒にレクレーションや、催しに参加して、自分自身がほんとうにY君と一緒に楽しめたからだそうです。</p> <p>ベッドに寝ているY君をはさんで、Y君の保護者と養護学校の教員たちで風船バレーをしたこともありました。Y君は実際に風船バレーをしていないのですが、Y君の保護者や教員たちが楽しんでいるのを見ることで、自分も楽しい気持ちになったのか、時折、笑顔をみせたりもしました。</p> <p>子どもは家族と一緒にいるときに一番安心します。なので、何か行事があればできるかぎり保護者の方に参加してもらうようにしています。そうすることで、保護者には教員たちの行っていることを明確に伝えることができるし、それを積み重ねることで保護者と教員たちの信頼関係が生まれ、理解というものが生まれると思います。全員で共有、共感することが大事だと私は思います。</p> <p>・</p> <p>4. 教研に対する報告者の感想</p> <p>保たちは、特別支援教育専攻なので、この佐藤先生の実践というのはとてもためになりました。実際に、Y君のような重度な身体不自由の方とは触れ合ったことがないので、教員たちの苦勞やさまざまなアイデアなどは驚くものでした。そして、Y君は重度でベッドに寝たきりなのですが、フリーチャイムを呼吸でのお腹の膨らみで鳴らしたりなど、Y君はとっても頑張って日々を過ごしているのだなと痛いほど伝わりました。そして、できたときの喜びなど、微々たるものではあるが笑顔をみせたりして、それを教員が見逃さず、すぐほめたりする場面では、特別支援教育はとても生半かな気持ちではこなすことのできない教育だとは思いますが、とても温かい教育だなと感じました。</p> <p>質問の保護者との関わり合いということでは、保護者と生徒児童が一緒になって楽しむ、そして、保護者との信頼関係を築くということに関しては特別支援教育に関わらず、普通教育にも言えることだと思いました。</p>	

図6 「重複障害児のY君に教えられたこと」実践の報告

同じ実践に対する報告があったため、25 報告中紹介された実践の総数は 21、実践の紹介された分科会数は 8 だった。分科会の総数が 24 であることを考えれば、紹介された分科会の数は一部に限定されている。学生たちが各々の専攻分野や関心のある分科会に参加する傾向が大きかったこと、一部の分科会が小部屋で行われていたことなどが分科会の数が限定された理由と思われる。

3. レポート記述にみる 2009 年受講学生による認識形成

本章では、講義終了時に学生に課した「合同教研の意義について考察する」という課題レポートに対する 2009 年受講学生の記述を引用し、学生の合同教研参加の意義について考察する。この考察を行うに際し本章

では、各分科会参加の意義と講義内で行った合同教研報告会の意義という2点に着目する。

3.1. 各分科会参加の意義

以下前節に示した分科会の順に課題レポートに対する学生の記述を抜粋した後、分科会参加の意義について検討する。ただし、学生名は伏せアルファベット順に記載する。

・国語教育

A 国語グループで国語教育について学んでいるが、大学で学ぶことは理論や理屈ばかりである。もちろんそれも教員を目指す上で必要であるが、教員になったときにそればかりだと戸惑うことも更に多くなるだろう。

(中略)、しかし今回合同教研に参加し、実際に教育実習へ行く際や教師になったときどのように国語の魅力を子どもたちに伝えていくか、非常に参考になる実践例を聞くことが出来た。教師の問いかけに対し子どもが実際にどう反応をしたのかなど、大学の授業だけではわからない現場の声を聞いて国語教育に対しさらに学びを深めていく意欲と興味が湧いた。

B 国語教育分科会では「国語科で重視すべきこと」について意見の交流が行われた。学習指導要領の中で国語科の目標は大きく「話す・聞く」「書く」「読む」に設定されている。このことについて「限定されてしまっているのでは」という意見が出たことが始まりだった。目標の根底にあるのは「言葉」である。そして、この三領域を達成するためには、「言葉」を使って「考えること」が重要だ。だからこそ国語科では土台となる「言葉」に着目することが必要なのではないか、という新たな課題が生まれた。他に「定番教材の読みはずっと同じで良いのか」という議論も行われた。参加者全員で意見を出し合うことで問題が浮かび、そ

れを今後の課題として共有できた。

授業づくりの根幹をなす事柄を理解する必要があると考えれば、学生たちが大学で学ぶ「理論や理屈」が否定されるものではない。しかしAによる記述からは、学生自身がその良さを実感しうる「参考になる実践例」を強く求めていることが察せられる。一方Bによる記述からは、「理論や理屈」についての討論が行われていたことが察せられる。

・外国語教育

- C 英語分科会に参加させていただいたが、そこでは大学では学びえないリアルな教育現場の声を聞くことができた。特に教育困難校における授業実践は、今まで私が一度も目の当たりにしたことのない現場でのものであり、今後教員を目指す上でも大変重要なお話であったように感じる。
- D 英語グループでは遠隔操作での授業のやり方や英語教育を無理やりやらされている教師の話について聞くことができた。遠隔操作とは地方の学校へネット回線を通じて授業を行うものであるが、これが非常に教師の負担になっているという事であった。小学英語の実情については、英語が得意でなく今まで小学校で英語を教えるための教育を受けたことがないにも関わらず ALT と英語だけで会話させられたり、指導案を1から作らされているという事が分かった。
- E 大学の授業では英語を専門にしている先生の話を書くことはあっても、英語は本当に苦手で困っているという先生の話を書くことはめったにない。しかし今回の合同教研ではそのような先生の話が聞け、とても新鮮だった。まだまだ深く考えたことはないが、この先英語教育に携わっていくものとして考えていかなければいけない問題の討論にも参加できた。何もきちんとした意見が言えない自分に腹が立ったりもしたが、あのような場で意見を言う経験は今

後役に立つと感じた。

上記C・D・Eによる記述は、いずれも教育実践を行う際の困難に関するものである。Dの述べたインターネット回線を用いた「遠隔操作での授業」や、Eの述べた英語が「苦手で困っているという先生の話」は、教育実践に関わる現代的な課題と言えるだろう。

・社会科教育

F 社会科はやはり暗記型の授業というイメージは未だに強く、それをいかに打開していけるかという課題をもとにいろいろな工夫を取り入れているということである。生徒の日常生活と結びつけたりすることで、身近に感じ興味や関心を持たせられるようにしたり、生徒が授業を通して自分の意見や考えを持ち今後の生活に少しでも活かすことができればという思いが伝わってきた。

G 分科会の閉鎖性があると思う。難しい話も多く専門以外の人は議論に加わりづらいと感じた。どのような人が来ても参加できるような場にする必要があると考える。

Fの述べる「暗記型の授業というイメージ」を打破していこうという意欲的な実践が数多く見られたことが伺われる。一方で、Gによる「分科会の閉鎖性」といった記述は、教育内容に実践者の思想が関わりを持つ社会科の難しさを示唆しているのではないかな。

・数学教育

H 合同教研にはたくさんの意義がある。しかし私自身のレベルが低い
ため、まだ発表に質問したり意見交換することができなかった。意見交換の場でも意味がなくなってしまうと感じた。私自身のレベルを上

げ必要があるし、合同教研の方も誰でも意見交換しやすい場の提供をしてくれるとさらに良いものになるのではと感じた。

- I 教師同士ならではの悩み、意見の相談ができる場であるとも思う。私は数学の分科会に参加したが、その発表の中で自分の反省点を挙げどうすべきだったかと他の教員などに投げかけ、悩みや問題を解決するという場面が見られた。そこでは様々な意見が飛び交い、一人で考えるよりもはるかに効率も内容的にも充実したものであったと感じた。教科の専門家が多数出席している分科会で議論することで内容の濃い問題の解決策・悩みの解決ができると思う。

数学教育分科会には民間教育団体関係者が多数参加している。これら関係者には数学教育研究者も含まれており、学問体系に沿った数学教育の在り方に関する議論が交わされている⁽⁴⁾。Hによる「レベルを上げる必要」や、Iによる「内容の濃い」との記述は分科会の体制に起因すると思われる。

・理科教育

- J 理科分科会に参加したが、小中学校・高校の先生や退職された先生、大学の教授など様々な立場の人が参加していた。授業の様子を発表する教師もいれば、理科教育の現状を発表する人もいた。情報が得られ、更にそれをその場にいる人で討論することにより考えがより深まる。
- K 理科のブースでの研究発表を多く聞かせていただいた。研究は具体的、実践的で大変興味深かった。実践者から直接話を聞くことで具体的に内容を理解できることに加え、実践の発表後にその研究を聞いている私たち学生を含め、その他の発表者の方々、大学の教授方、そして実際に小学校や中学校で教員を現役でやっている方の実践に対する意見交流や質問の場が設けられ、その場で疑問や詳しい内容を聞くこ

とができた。

学生の記述にある「大学の教授」は、北海道における教育方法学研究者を指す。理科教育分科会では1974年の合同教研開始時より教育研究者が深く関わり、実践を足場とした教育研究が展開されてきた。このような教育研究の蓄積が、「意見交流や質問の場」を参加者すべてに確保した上で「考えがより深まる」議論を達成する一因ではないか。

・教科外

L 大学の講義で、いじめやふとしたことがきっかけで不登校になる子はたくさんいること、そういった子にはその子の気持ちになって接し家庭訪問など学校復帰のために色々と努力しなくてはならないと学んでいた。この分科会でもそういった議論がなされていると思い入室した。しかし実際になされていた議論は違った。子どものことを本当に考えた場合、学校復帰だけが考えられる手段ではないこと、フリースクールなどの実践、不登校の過去を持つ青年がこれから前向きに生きていけるための取り組みなどがその内容だった。まずここで自分のこれまでの固定概念であった「不登校の子どもはどう復帰させるかが重要である」という考えが覆された。

M 参加したのは障害児・障害者の教育と福祉分科会である。専攻が特別支援教育であることもあるが、聞き入ってしまうものばかりであった。

(中略)、教研の意義として、その場で意見交換を行うことができることもある。わからなかったことはその場で聞けて、すぐに疑問を解決することができるというのはとても魅力的である。実は私たちが佐藤先生に質問しようとした際、他にも質問する方が多くて、時間が無くなってしまった。なので、分科会が終了した際、私たちは直接佐藤先生に聞いた。分科会外の時間であるにも関わらず、先生には親身になって答えて

いただき本当に感謝している。

事前資料によれば、不登校・登校拒否・高校中退分科会のレポートは1つだった⁽⁵⁾。この分科会では参加者の議論が中心をなしているようである。この議論が深められたものであったことは、Lによる記述から確認できる。また講義でのMらによる報告では、学生が報告内容に対して息を呑んだように静まった後予定時間をはるかに超える質問が連続して出されたほど、新鮮な驚きを与えていた。

3.2. 集会参加報告会の意義

本節では講義内に行った合同教研報告会に関する学生のレポート記述のいくつかを抜粋し、報告会の意義について検討する。

N 今回の授業では自分たちの参加してきた分科会について発表しあった。これはとても有効な合同教研の活用法だと思う。自分の体は一つしかないので、色んな分科会を覗いてみたいと思っても限界がある。発表しあうことで、色んな分科会の情報に触れ、知識や考えを広げていけるので合同教研の後の発表は良い機会だ。

Nと同様な記述は他にも見られた。報告会の実施によって「自分の体は一つしかない」という状況下で「いろんな分科会の情報に触れ、知識や考えを広げていける」機会を提供しえたと思われる。レポート記述には以下のようなものも見られた。

O 報告会を通じて、同じ実践報告を聞いても人によって異なった受け止め方をすることもわかった。算数の分数についての実践報告に参加したグループは三つ程度あったように思うが、どのグループも受けた印象や

概要のまとめ方が異なっていて面白かった。受け取る側の知識量や理解度などにより情報の伝わり方や感じ方が違うことを、常に念頭に置いて人と接していくことが必要だと思った。

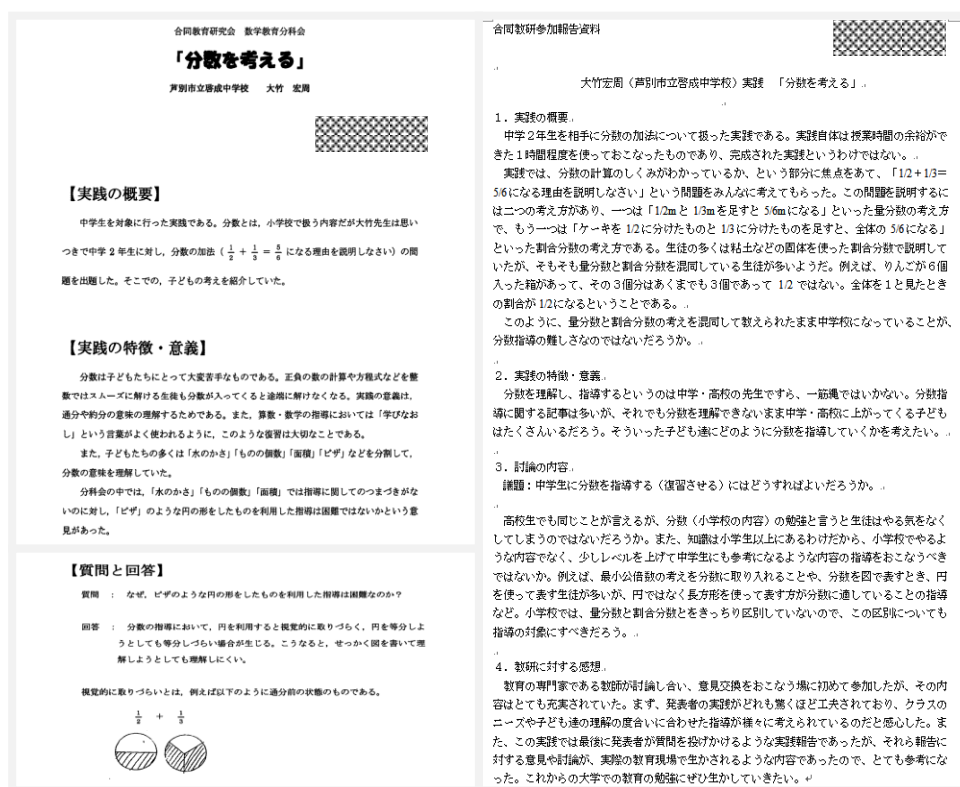


図 7 同一実践に対する 2 つの報告

同一の実践に対して複数のグループが報告する例がいくつか見られた。O の指摘した分数指導実践では図 7 のように「実践の概要」と「実践の特徴・意義」の記述に違いがある。また、学生による質疑応答に関して以下の記述が見られた。

P 学んできたことを皆の前で発表する活動もとても意義があった。自分

で資料にまとめることによって理解も深まるし、違う人の発表を聞くことによってさらに興味が増した。資料に書いていないことまでつっこんで質問してみることで知らないことがたくさんあることが実感できたと、質問された人は皆に理解してほしいという気持ちがあったのでとても充実感のある授業形式だった。

Q 質問をすることで自らその実践に関する報告をしっかりと聞こうと思えたので、どの報告もとても自分の身になったと思う。

学生には報告会での質問を義務付けた。自由な議論の実現という点から考えれば、質問を義務付けることは適切とは言えない。しかし質問を義務付けたことにより、学生の集中が高まったようだった。最初の質問を起点として議論が活発化する場面や、1人で多くの質問や意見を述べる学生が複数見られた。Qによる「質問をすることで自らその実践に関する報告をしっかりと聞こうと思えた」との記述は、これらの事実と一致する。講義前半部で解説した白尾実践でも「認識の共有」が実践の要件として指摘されていた⁽⁶⁾。白尾が子どもたちに対して求めた実践の目標と同様な事柄が、学生たちの報告によって達成されたと言える。

3.3. レポート記述から把握される学生の認識形成の枠組み

3.1 および 3.2 で抜粋したレポート記述から、合同教研と講義内報告会への参加によって学生にみられた認識形成は3点に集約される。以下対応する記述とともにこれら3点について述べる。

第1点は、現代の教育現場のありように対する認識形成である。教育困難校での授業実践や小学校での英語の実践報告は、現代の学校の問題を明らかなものになっている。また数学教育や理科教育分科会参加者からは、教育研究者や民間教育団体との協力でよりよい授業実践を行おうとする教員の姿が講義参加者全員に明らかにされた。教科外の分野でも、

不登校児への対応に対する固定概念の打破や、養護教諭と子どもの深い信頼関係に対する驚きといった事柄に学生たちの新たな認識形成が確認される。

第2点は、学生としての現状に対する認識形成である。各分科会に参加した学生たちは、意見をうまく言えない自身に苛立ちレベルの高い議論に戸惑いながらも、教育実践者や研究者と有益な意見交換を行った。分科会関係者の温かい対応に支えられ、学生たちは実践や研究に対する関心を深め、自身も教育現場の一員であることを自覚した。

第3点は、講義内報告会による認識形成である。他の学生による報告を聞き意見交換を行うことにより、学生たちはより多くの情報を得つつ実践に対する受け止め方の多様さを知った。これら質疑応答は学生による理解の深まりを促した。

以上、教育現場のありようを知ること、学生自身の現状を知ること、質疑応答による理解の深まりという3点で合同教研への参加は学生に新たな認識形成の契機となったと考えられる。

4. レポート記述にみる2010年受講学生による認識形成

前節で述べたように、2009年受講学生によるレポート記述から学生の認識形成に関わって以下の3点が指摘された。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1. 現代の教育現場のありように対する認識形成2. 学生としての現状に対する認識形成3. 講義内の報告会による認識形成 |
|---|

図8 学生の認識形成についての仮説

本章では、図8に示した3点を学生による認識形成に関する仮説とし、合同教研への参加を経た学生の認識形成のありように

ついて、2010年受講学生によるレポート記述を検討する。ただし、本章で検討材料とする学生のレポート数は2009年の2倍以上となり、複数の学科・学年にまたがるものとなった。それゆえ本章では、仮説図8の枠組みに沿った記述と、参加学生数・学科数の増加に伴って明らかにされた特徴的な記述という2つの方向から、合同教研参加による学生の認識形成のありようについて検討する。

4.1. 認識形成の枠組みとの対応

・第1点：現代の教育現場に対する認識形成

外国語教育分科会参加者による教育困難校での授業実践や、小学校での英語実践といった報告は、現代の学校における問題を明らかなものにしていて、2010年のレポート記述においても、以下の記述で2009年と同様の指摘がなされている（記述末のかっこのうち、教は教員養成大、栄は私立大栄養学科、外は私立大外国語学部を示す）。

- ・特に印象に残ったのは、過疎地域での小学校の外国語活動の授業の報告だった。自分は今まで教員のよい面ばかりしか思い浮かばなかったが、今回試行錯誤を繰り返しながら授業に取り組み子どもたちと向き合っているというお話を聞いていると、問題点や自分の授業や子供たちとの向き合いについて考えさせられた。（教）
- ・先生方の様々な考え方や試行錯誤、児童・生徒との関わり方などを聞くことで、教育現場ではどのように指導をするか考えているのかが少し見えた。また、ベテランの先生も新任の先生も関係なく、正解がわからないまま実践をしていることがわかった。（教）

上と同様な感想は複数見られた。また2009年のレポート記述では、不登校・登校拒否・高校中退分科会の教育参加者による不登校児への対応

に対する固定概念の打破といった事柄に、学生たちの新たな認識形成が確認された。2010 年のレポート記述でも、以下の記述で昨年度と同様の指摘がなされている。

- ・不登校や登校拒否の多くの理由は対人関係やいじめだと勝手に決め付けていたが、内容を聞くと突然勉強が出来なくなったことから別の進路を選んだ人やふとした日常が急遽ストレスになるなど、自分が思っている理由以外にも不登校や登校拒否の理由になりえることを知ることが出来た。身近に登校したくないという人がいない環境にいたため相手のことを深く考えることがなかったから、この議題にはとても悩まされた。(栄)

以上の他 2010 年のレポート記述では、昨年度参加者のいなかった分科会に対する記述から、現代の教育現場に対する認識形成を示す以下のものが見られた。

- ・保健・体育の合同研究集会に参加し感じたのは、自分の考えが限定されていたことだった。縦割り班の活動報告では、1 から 6 年生の 6 人でひとつの班を作るといった班の作成方法には驚かされた。縦割り班を行うことの出来る条件は少人数で全学年 1 クラスであることであり、そのような環境になかった自分は、班はクラス内で作るものであり全学年で作るなど考えていなかった。(栄)
- ・音楽教育の分科会に参加して、音楽の授業時間が減っているという現状を知った。そして、教職員はその限られた時間の中で生徒が授業に興味を持つ事ができるように、毎時間の授業内容について工夫をしている事がわかった。(栄)

・第2点：学生としての現状に対する認識形成

2009年のレポート記述から、意見をうまく言えない自身に苛立ちレベルの高い議論に戸惑いながらも、実践者や研究者と有益な意見交換を行った学生たちの様子が明らかとなった。2010年のレポート記述でも、以下の記述で2009年と同様の指摘がなされている。

- ・実感したのは勉強不足であるということと考え方の甘さなど。勉強不足だと感じたのは、全く話についていけなかったことが大きい。もちろん相手は教師としての実績があつて教材研究や実践での経験も豊富な方々ばかりだったが、それにしてもという感じだった。だがそのことに気づけたことは、この集会に参加した意義があつたといえると思う。(外)
- ・分科会別に分かれて、発表を聞いた後の質問で、積極的に発言している他学生やそれに答える発表者を見ると、自分よりも教育について考えていることが伺えた。(栄)

ただし、2010年のレポート記述には2009年と若干異なる傾向が見られた。その傾向とは、以下の記述にみられる、現状をふまえた上での前向きな内容を示す記述である。

- ・ほとんどの人が教育に対しては勉強不足でこの合同研究についていけなかったみたいだけど、この集会に参加したことで改めて自分の無知さを考えさせられることができるいい機会だったと思います。自分が教壇に立つにはまだ早くもっともっとこれから先生になる上で、しっかりとした自分の考えや常識、専門的な知識、生徒のことを理解する能力が足りないことを感じました。(外)
- ・大人たちとの討議に自分も参加できるので、自分の考えを討議の場

でいかに発言できるかがポイントになってくる。私は自分のレベルが低いのではないかと思いなかなか多くの発言はできなかったが、それでも質問や発言をしようと考えることに意義があると思う。

(外)

- ・現場経験の無い私たち学生ではあるが、経験が無いからこそ持っている視点もあるはずである。もしかすると現場で活躍する教師にとって、私たち学生がもつ視点は、時として非常に斬新で自分の教育観に大きな刺激を与えるということも十分にありうるのではないだろうか。したがって、教育研究集会で私たち学生は、謙虚に話を聞きそれを受け入れる姿勢は持ちながらも、「経験が無いから」といって引き下がりすぎるのではなく、食欲に自分なりの意見、見解も伝えていくという姿勢がふさわしいだろう。その中で自分の間違いに気づいた時にそれを修正し、これから先の確固たる自分の教育観の形成のために役立てれば良い。(教)

推測ではあるが、上のような記述がみられた理由の1つは、講義中の指導にあるように思われる。2009年のレポート記述の検討で筆者は、学生による現状認識が彼らにマイナスなものとなつてはならないという意識を持った。そのため、上記感想と同様な発言を集会参加前の学生たちに行っていたのである。

・第3点：講義内報告会による認識形成

2009年のレポート記述から、他の学生による報告を聞き意見交換を行うことで、より多くの情報を得つつ実践に対する受け止め方の多様さを知る学生の様子が明らかになった。これら質疑応答は、学生による理解の深まりを促すものとなった。2010年のレポート記述でも、以下の記述で、より多くの情報を得つつ実践の受け止め方の多様さについて学びながら、

充実した議論を行った学生の様子が明らかとなっている。

- ・合同教育報告会では自分が見に行った分科会以外の分科会におけるレポートの報告がされ、レジュメやパワーポイントも的を絞ってわかりやすく作られたものが多かったため、合同教研の時に自分がその発表を聞きにいないにも関わらず、その発表の流れを知ることができた。(教)
- ・同じ分科会に参加しているグループもいくつかあったが、発表者によって捉え方やプリントとして配られた中の感想も違い、読む方としては二つの捉え方、感想を読み自分ならば…と考えることでその内容をより理解することができる。(教)
- ・私は、今回の講義内報告会でぼろぼろに打ちのめされてしまった。それは、自分自身の考え方やまとめ方の甘さが招いたことだ。ただ、今回の報告会で打ちのめされたことは私にとってはよかったのかもしれない。こうやって、今の自分自身がまだまだ甘いということに気づけたのだから。(外)

以上図8に示した3点を枠組みとした2010年のレポート記述の検討では、2009年と同様な記述が見られた上に、記述の増加に伴いより詳細な形で、図8の3点がとらえられている。

4.2. 2010年度検討から特徴的に把握される認識形成

2010年のレポート記述には、2009年のレポート記述の検討ではごく少数しか見られなかった2種の記述が、全体の1割以上の学生から共通してみられた。以下記述ごとにまとめる。

・第1点：教員等の他者との交流

分科会当日には、どこからともなく「今年は学生が多いね」という声が聞かれた。学生たちが現職教員と何らかの交流を図ったことは分科会会場で察せられたが、学生たちの以下の記述からも明らかとなる。

- ・学生が意見を言いやすいように場の雰囲気を使い分けてくれたことがとてもありがたかった。自分は授業の一環として参加したが、研究報告を聞いているうちに自分が疑問に思っていることを質問することができ、自分の質問に対し先生方が一緒に考えてくださったことに、驚いた。(外)
- ・個人的には分科会の後に前年から期限付きとして高校で教員として働いている先生とお話する機会を得ることができ、実際の仕事の様子を一部分であるが聞かせていただいた。お話の中で生徒とのやりとりや部活指導、進路指導の大変さ、休みがなかなか取れないことなど、教員という仕事の楽しさ、大変さを垣間見ることができた。(外)
- ・今回の合同教育研究会に参加されていた先生の中で、漢字についてレポートを書いていた先生がいた。その先生にレポートを送っていただきとてもためになった。(外)
- ・教員の方が今実際に行っていることを多く語られていたので、現場の方の話というのはとても興味深くそしてためになった。他にも、他の学生さんも来られていたので学生という一番身近な意見も聞くことができよかった。(栄)

上の記述からは、教職課程履修学生を仲間としてとらえ、より多くのことを伝えようという教員たちの熱意が感じられる。学生たちもまた、それらの熱意を受け止め参加時間内で可能な限りの交流を図っていたこ

とが伺われる。

- ・第2点：研究集会に対する意識の変化

合同教研参加について、学生たちには講義開始時に履修の要件として告知している。突然研究集会への参加を義務づけられた学生が「面倒くさい」と思うのは当然だろう。しかしほとんどの学生は、報告会や報告者との個人的な話の中で「参加して良かった」と口にする。2009年講義時でもこの傾向は見られたが、2010年のレポート記述には学生のレポートに以下のような記述が複数みられた。

- ・合同教研に参加するにあたって、行く前は面倒くさいと思っていた。しかし行って話を聞くと、もっと知りたいという気持ちになった。冬休みに個人的に現職の教員の勉強会に行ってきた。これからも、いろいろな研究会や勉強会に参加したいと思う。合同教研はそう思うきっかけとなった。(教)
- ・合同教研に参加する前は「難しそう」「つまらなさそう」というイメージだったが、いざ参加してみると、雰囲気は和やかな感じで、自分たちが受けたことのない授業の実践報告や教科書に載っていない先生の持ち込み教材についてなど、どれも興味深い発表ばかりだった。(教)
- ・将来教員を目指す、そうでなくても教員免許を取得するという立場の者にとってみたら、やはり大学の教室で教授の話を聞いているだけでは学べない実際の現場というものがあると私は考える。そのために実習があるのだと思うのだが、その予行のための知識や教師としての心構えなどをこの合同教研で学んだり、感じ取ったりすることもできた。(教)

上記2点に関する記述から、学生たちが各分科会で教員たちと良い人間関係を築いたことが察せられる。各分科会の議論の模様を記した『北海道の教育』にも、教員と学生との関係構築がなされたことが以下のよう

に記されている。

今年の合同教研では多くの大学生が国語分科会にも参加し、活発な議論ができた。(中略)、親(社会人大学生)からは娘の国語教育について「書かない作文」「読まない物語授業」に不安を感じていると報告された⁽⁷⁾。

上記「親(社会人大学生)」は特定が可能である。この学生は「教職を志す一学生として聴講だけのつもりで参加したが、友好的な雰囲気につられ真剣に討議に参加してしまった。プロの経験ある教師にあれこれ意見を述べるのは礼を逸していたかもしれないと反省している。(外)」と記述している。この記述からも「活発な議論ができた」ことが伺われる。また、2009・2010年の双方で学生の報告数が多く、学生の固定概念を打破する契機となっていた不登校・登校拒否・高校中退分科会に関して、『北海道の教育』では以下の記述が見られた。

子どもの成長に沿った現場での実践交流ができた事は大きな財産を得たといえる。また教職を目指す大学生の参加や発言に心の中を見開かされたことも大きな収穫といえる⁽⁸⁾。

「大学生の参加や発言に心の中を見開かされた」との記述は、学生の固定概念の打破という記述と表裏一体ではないか。また、栄養学科学生の参加の多かった家庭科教育分科会について『北海道の教育』では以下の記述で学生参加の意義がまとめられている。

大学生から発せられる教育実践や教育現場に対する疑問や質問が分科会における活発な討議と交流を促進した。学生の参加を得たことが、討議の深まりと広がりを支えた⁽⁹⁾。

5. 実践の成果と今後の課題

以上本稿では合同教研に参加した学生の認識形成に関して、2009 年のレポート記述から得られた枠組みに従い、2010 年のレポート記述を検討した。2010 年記述の検討の結果、この枠組みに従った形で学生による認識形成をとらえることが可能となった。ただし 2010 年記述では、対象学生数が 2 倍になったことで教員たちとの交流が促され、枠組みをはみ出したかのような記述がいくつか見られることとなった。それゆえ、従来の枠組みは踏襲されるべきと思われる一方で更なる検討の必要性も生じたといえる。

研究集会参加を学生に課した講義について、学生による以下の記述を取り上げたい。

- ・講義の前半で、実践に対する報告を何時間もかけ内容把握、まとめをおこなった。それを小グループ学習で私たち自身が 1 から行い、発表したのが今回の報告会であった。なので、講義の前半で行ってきたもののまとめという役割がある。(教)

上の内容は講義のねらいとしていたことと一致する。この学生に限定して述べるなら講義の目標は達成されているといえるが、同様な記述を行った学生は 2 名にすぎない。講義のねらいとするところが学生に対し明白となるような内容構成が、短期的な課題として求められる。

最後に、栄養学科の学生に焦点を絞り長期的な課題を述べたい。他の

学科に比べ栄養学科学生のレポートからは以下のように、自身の専攻との関わりで記述を行う例が多く見られた⁽¹⁰⁾。

- ・栄養教諭はまず食に関することが主体となるが、子ども達と関わるの場を作り心身の成長をサポートする行動をしていかなければならないと考えた。このように各分科会での様々な情報が考えるきっかけとなる。(栄2)

栄養学科の学生の多くは家庭科教育分科会に参加し、そこで教員たちと良い関係を作っていた。しかし一方で、以下のような要望もみられた。

- ・今回の合同教研には、栄養教諭に関連したブースがなかったので、もし次回開催するのであればそのようなブースも設けられていたらよいのではないか。(栄)
- ・栄養教諭はまだ歴史が浅いが、今後合同教研で給食や栄養に関わる分科会が加わり学校給食の課題など共に考える場ができればよいと考える。(栄)

栄養教諭の専門性の高さという点を考慮するならば、分科会のような形で専門的な議論を行った成果を踏まえつつ家庭科教育分科会のような場で教科との連携の方向性を探ることが、栄養教諭を目指すものにとっては望ましい形だろう。このような状況を達成するための働きかけが、実践上の長期的な課題となる。

註

(1) 木塚雅貴「授業観察とその省察を中心とする教員養成の方法に関する

研究 一省察能力の育成に着目して一」『日本教師教育学会年報』第 20 号，2011，122 ページ

- (2) 白尾裕志「社会科実践と子どもの社会認識 -『話し合う』ことと『書く』ことで深める社会認識-」『社会科教育研究』No. 107，2009，45 ページ
- (3) 合同教研不参加の学生は，2 年間にわたる実践で 1 名だった。この学生に対しては，報告者筆による教育論文を提示しその意義や問題点について報告を求めた。
- (4) 数学教育分科会の共同研究者のほぼ全てが北海道地区数学教育協議会の会員である。また，北海道大学教育学研究科・教育方法学研究室において数学教育を専攻する教員・院生は，全て北海道地区数学教育協議会の会員である。
- (5) 2009 合同教育研究全道集会実行委員会発行『分科会レポート一覧』の記述から。
- (6) 白尾前掲書(2)，35 ページ
- (7) 荒木美智雄『『かしこく・ゆたかに・たくましく』本質的問いを『国語教育』の中心課題に据えて』『北海道の教育〔2011 年度版〕』，2011，115 ページ
- (8) 福田好孝・十河幸喜「伝承と発展そしてヒューマニティー，それが美術」『北海道の教育〔2011 年度版〕』，2011，177 ページ
- (9) 青木香保里「子どもの今を共有し，現実を探究する家庭科」『北海道の教育〔2011 年度版〕』，2011，206 ページ
- (10) 専攻に関する記述は，栄養学科学学生が約 4 割だったのに対し他の学科は 1 割程度だった。

引用文献

- ・木塚雅貴「授業観察とその省察を中心とする教員養成の方法に関する研究 一省察能力の育成に着目して一」『日本教師教育学会年報』第 20 号，2011
- ・白尾裕志「社会科実践と子どもの社会認識 -『話し合う』ことと『書く』ことで深める社会認識-」『社会科教育研究』No. 107，2009，45 ページ
- ・『北海道の教育〔2010 年度版〕』合同教育研究全道集会実行委員会編，2010
- ・『北海道の教育〔2011 年度版〕』合同教育研究全道集会実行委員会編，2011

(あらいしんいち， 札幌大谷大学社会学部地域社会学科)